

**特集：SENDプログラムの「実践報告」**

## タマサート大学における SEND プログラムの実践

シリワン ムニントラウオン

### 要 旨

タマサート大学は 2013 年から早稲田大学の SEND プログラムに参加し、初めて短期派遣学生を早稲田大学日本語教育研究科から受け入れ、タマサート大学からは大学院生を長期派遣学生として早稲田大学に派遣した。さらに 2015 年度には 2 名の短期派遣学生と 1 名の長期派遣学生の受け入れを実施した。現在までの受け入れ及び派遣の成果や経緯を踏まえて、SEND プログラムでは改善が加えられ、2015 年度に新たな受け入れプログラムが設けられた。タマサート大学では従来の授業見学と実習のみでなく、タイ人学生との交流の機会を増やし、文化紹介活動や課外活動や野外活動などを設置した。一方で受け入れ後、タマサート大学の日本語学習者は日本語や日本の社会文化に対する関心、日本語学習のモチベーションを向上させている。

### キーワード

SEND プログラム、派遣学生、タマサート大学、日本語学習者

## 1. SEND プログラムの現在までの受け入れ、派遣状況

### 1.1 タマサート大学への受け入れ

#### 1.1.1 短期プログラム

タマサート大学は、2015 年 8 月 27 日から 9 月 12 日まで短期プログラム日本語教育実習生（以下、「短期派遣学生」と呼ぶ）として、早稲田大学日本語研究科の大学院生 2 名を受け入れた。実施前に、現在までの受け入れの成果や経緯を踏まえて、早稲田大学 SEND プログラム担当教員とともに検討を重ね、内容の改善を図り、新たな受け入れプログラムを設けた。より効果的で、タイ人学習者のニーズに応えられる活動、また短期派遣学生の学びや経験となる活動などを取り入れた。短期派遣学生への活動内容として、授業見学、教壇実習、大学院の授業への参加、大学院生との交流、課外授業、教材作成、タイ文化体験、課外活動、成果発表を設けた。（表 1 参照）

#### 1.1.2 長期プログラム

2015 年 8 月 27 日から 12 月の上旬まで長期プログラム日本語教育実習生（以下、「長期派遣学生」と呼ぶ）として、早稲田大学日本語研究科の大学院生 1 名を受け入れた。長期プログラムは短期プログラムと実施期間が重なるため、長期派遣学生と短期派遣学生は共に活動に参加した。短期派遣学生の帰国後、長期派遣学生は「ビジネス日本語」の授業に

参加し、「エントリーシートの書き方」を指導した。さらに、教養学部職員を対象にした講座「日本語の挨拶と日本のマナー」を設け、長期派遣学生が指導した。(表1参照)

表1 長・短期プログラムの活動内容

活動項目	内容	短期	長期
授業見学	中・上級文法の授業	○	○
	通訳の授業	○	○
	日本史・日本文化の授業	×	○
	会話の授業	×	○
教壇実習／ゲスト参加	「総合日本語 7」(中・上級文法の授業): 日本文化紹介(携帯電話のマナー)	○	○
	「総合日本語 7」(中・上級文法の授業): 言葉のネットワーク	○	○
	通訳の授業の発音指導	○	○
	「ビジネス日本語」: 「エントリーシートの書き方」の指導、マナー発表「席次」の見学とコメント	×	○
大学院生の授業への参加／ 大学院生との交流	研究テーマの紹介、ディスカッション	○	○
課外授業 (正規の授業以外の 時間を使った実習)	文字語彙指導	○	○
	「日本語の挨拶と日本のマナー」	×	○
教材作成	モデル音声ファイルの作成	○	○
タイ文化体験	タイダンス、タイの民族衣装	○	○
課外活動	エメラルド寺院・王宮の見学、	○	○
	マングローブ・熱帯雨林の見学、	○	○
	科学博物館の見学、卸市場の見学	○	○
	タイの卒業式への参加	×	○
	JALの見学(ビジネス日本語の授業)	×	○
成果発表会	成果発表	○	○
	タイダンスの披露	○	×

注: ○ = 「参加した」 × = 「参加しなかった」

## 1.2 タマサート大学からの派遣

### 1.2.1 短期プログラム

2015 年度にタマサート大学は初めて早稲田大学短期プログラムへの参加希望者を募り、3 名の学部生を派遣し、無事プログラムを終了した。

ところが、翌 2016 年度には希望者が 0 名であった。これは早稲田大学の短期プログラムで受講できる授業が「初 - 中級日本語」のみのため、すでに中級日本語まで学習している学生にとっては留学効果があり感じられないことが理由だと思われる。(表 2 参照)

### 1.2.2 長期プログラム

2015 年度に早稲田大学長期プログラムに参加したタマサート大学大学院生は 1 名で、当該の学生は、早稲田大学で日本語教育の授業を履修しながら、タイから帰国した日本人短期派遣学生のための「タイ語の授業」を設けた。帰国後、早稲田大学で取得した単位をタマサート大学の類似の科目を履修したものと認定して単位付与をした。

表 2 タマサート大学からの派遣

年度	学部生	大学院生	合計
2013	-	-	0 名
2014	-	2 名	2 名
2015	3 名	1 名	4 名
2016	-	1 名	1 名

## 2. 教育成果

上記のようにタマサート大学では様々な活動を設置し、派遣学生のニーズに応えるべく、早稲田大学 SEND プログラムの担当教員とともに教育プログラムを構築した。日本人派遣学生は様々な活動に参加したが、本節では実習活動とその成果のみ述べる。

### 2.1 日本人派遣学生受け入れ時の授業の様子・活動の成果

#### 2.1.1 発音指導

音読とシャドーイングの課題で学習者が提出した音声データを日本人派遣学生が聞き、評価を行った。授業では全員に共通する誤りを派遣学生が解説した上で、一人一人に対する改善点を具体的に指摘し、アドバイスした。また、翌週には注意された点が改善できたかどうか、派遣学生が再度音声データを確認し、その結果を学習者にフィードバックした。学習者は熱心に耳を傾けて、積極的な態度で練習に臨んでいた。また学習者が日本語に翻訳したタイのニュースを派遣学生がモデル音声ファイルとして作成したことでリアルな音源を学習者に提供することができ、大変充実したクラス活動となった。

#### 2.1.2 課外授業：文字語彙指導授業

文字語彙指導では、多くの学習者が積極的に単語を調べ、関係のある言葉を線で結びながらイメージツリーを作成し、オリジナル単語帳も作った。また、授業では、派遣学生が

きれいな字の書き方を板書で示し、細かく解説した。学習者たちは日本語を母語とする派遣学生の話し方や発音に注目していた。

### 2.1.3 日本文化紹介授業

「総合日本語 7」のタイ人教員担当の授業では、【公共の場におけるスマートフォン・携帯使用のマナー】について派遣学生が発表を行い、日本で実際に起きているコミュニケーションツールに関する問題点を20～30分程度紹介した。学習者が日本に留学した際に、またタイにおいても、どのような点に留意してコミュニケーションツールを使用すればよいのか考察を行った。生の日本の情報に、学習者は熱心に話に聞き入り、派遣学生にたくさん質問をしていた。

今回の体験により、学習者の日本語学習に対するモチベーションは確実に上がったと思われる。学習者は日本語の説明や発表に対して、非常に真摯な態度で授業に臨むようになり、授業内容や言葉の意味に関する質問も増えてきている。

### 2.1.4 ビジネス日本語「席次」、「エントリーシートの書き方」

JP489「ビジネス日本語」の日本人教員担当の授業では、長期派遣学生がマナー発表「席次」の見学とコメント、「エントリーシートの書き方」の指導と提出物のチェックを担当した。

学習者はできるだけ多くの日本人と接する機会を求めており、社会経験豊かな長期派遣学生の話をよく聞いていた。また、エントリーシートの書き方の授業では、学習者に自力で作成できるように指導できたことで、将来の就職について真剣に考えるいい機会にもなったようである。

## 2.2 日本語教育担当の教員の気づき

学習者のメリットは、まだ日本との接点が少ない中で気軽に専門分野の日本人と触れ合うことができる。また、タイ・日本の学生間の交流により、互いに異文化に対する関心や疑問点に触れ、意見を交換し、新たな気づきや相互理解につながった。

一方、教員側にとっては、日本人の視点を踏まえて、今後の授業を見直す絶好の機会となった。また、互いの日本語教育事情に関して情報交換することができ、タイ人学生のニーズや興味を確認することもできた。合わせて社会人経験に長けた派遣学生も参加するなど、様々な交流ができることも魅力であった。

## 3. SEND プログラムの意義と今後への提言

SEND プログラムで実践された日本人派遣学生の日本語授業への参加や学習者との交流は様々な側面において評価することができる。

まず、タイ人学習者にとっては、日本人や日本文化をじかに接したことで言語学習のモチベーションが確実に高まっている。また、日本人派遣学生は派遣先の国の言語や文化を短期間で吸収でき、現地での経験は今後の学習の糧となりうる。

一方、教師側は、教育プログラム構築、学生・学術交流を含め、SEND プログラムを通

じて新たな触発を受け、互いの日本語教育事情を実際に自らの目で見えて感じ取ることができる。様々な交流は参加者全体の相互理解につながっており、このような形での交流を長期間にわたって持続することは、学生や指導者の育成に重要だと考える。

また、受け入れ機関である本学も、本プログラムに参加することによって様々な視点が得られた。日本語教育の授業形態は各国でそれぞれ異なるため、日本人派遣学生の受け入れを通して互いの日本語教育事情を共有することができ、現地で実際に外国人学習者のニーズを把握する機会となり得る。派遣学生にとって大いに参考となるであろうし、また、授業の質の向上、新たな視点を導入するという観点からも教員の相互交流は有益である。

今後、グローバルな人材の育成がますます重要な課題となる中で、本大学も独立行政法人化し組織改革が行われるため、有機的な協力体制の構築を進めている。その中で盛んな交流を続けることで、最新かつ的確な人材の育成を行い、産業界のニーズなどにも柔軟に対応できるよう目指している。

SEND プログラムの取り組みは、相互にとって、また社会貢献の観点からも有益であり、今後の継続が望まれる。

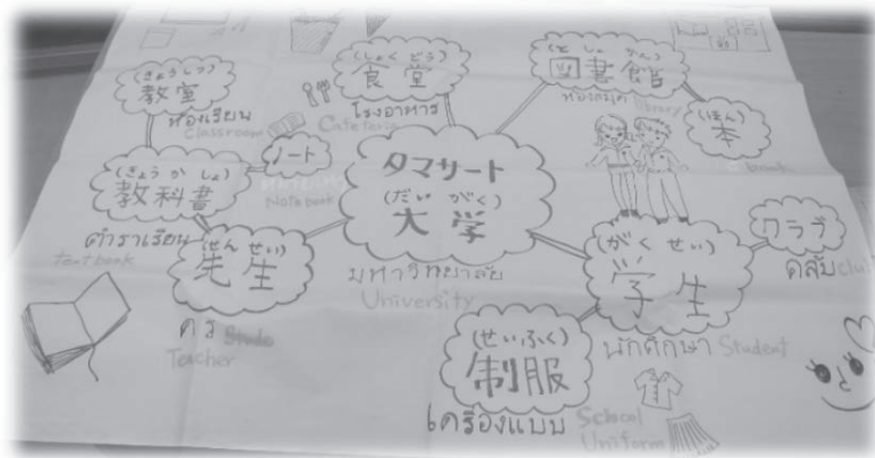


図1 文字語彙指導授業：課外授業

(しりわん むにんたらうおん タマサート大学教養学部)